

地域振興を意識した学生のキャリア計画を促す科目の開発 ーキャリア教育科目を通してー

Developing courses that encourage students to plan their careers with regional development in mind
-Through career education subjects-

磯部 聖子¹, 石井 雅幸², 井上 淳³, 落合 千裕⁴
Seiko ISOBE¹, Masayuki ISHII², Jun INOUE³, and Chihiro OCHIAI⁴

¹大妻女子大学キャリア教育センター, ²大妻女子大学家政学部, ³大妻女子大学比較文化学部,
⁴大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：キャリア計画, キャリア教育, キャリアデザイン, 地域振興
Key words : Career planning, Career education, Career design, Regional development

1. 研究目的

我が国の総人口は、2008年をピークとして減少が続き少子高齢化などにより地域経済社会の衰退が危惧されている。本学の正課キャリア科目キャリア・ディベロップメント・プログラム（以下、CDP）では、毎年一つの地方自治体と提携し、学生は地域の課題解決に取り組んでいる。各地域の自然・産業・文化等の魅力を発信することは、人口減少や地域経済の衰退に歯止めをかけ、持続可能な地域社会の一翼を担うことにも繋がると考える。学生が自らのキャリアをデザインする中で、我が国の課題を意識し解決策を考えることは大変意義あることである。

そこで本研究は、本学の学生が自らの将来像を描く上で、「地域振興」を取り入れることにより、大学での学びがきっかけとなり、つまり我が国が抱える課題に取り組むことは、その将来に向けて一歩を踏み出すことに繋がることが期待される。学生自らが「地域振興」を考え、関係人口になるなどの要素を取り入れながら、大学での学びがキャリアに活かせるような科目の開発とその開発したCDP科目の成果を明らかにすることが、本研究の目的である。

これまで、本学の後期授業で開講しているCDPにおいて、北海道美瑛町とは2019年度、2021年度に提携し、2023年度は3回目の提携となった。

2023年度にCDP-E区分（美瑛町プロジェクト）を受講した学生の授業開始前と終了後に、美瑛町

プロジェクトに取り組んだ感想や地域振興についての意識の変化を明らかにすること、および2023年度は授業開始前に初めて受講学生4名が北海道美瑛町視察を行い、参加した学生は授業で活かされたのか、今後どのように地域振興に関わろうと考えているのかを明らかにしたいと考える。

このように、美瑛町が抱える課題を学生がその課題解決のための施策を考えることで、「地域振興」に関する意識を高め、将来的には自身のキャリアの選択肢の一つとして活かすことができるように、本学のキャリア教育科目の改善および開発につなげていきたいと取り組んだ。

2023年度、美瑛町まちづくり推進課から示された受講生への課題は、「東京都内でのイベント×Z世代に響くSNS発信プロジェクト」であった。初回授業では、美瑛町まちづくり推進課より、人口減少、観光客の受け入れで起こるオーバーツーリズム、通過型観光、観光客の往来や農地侵入による農作業の障害や農作物の病気感染の恐れ等の観光と農業のバランス、燃料費や肥料の高騰による農家の経済的負担等の農業が抱える厳しい現状、地元高校の定員割れ、情報発信方法、都会での知名度の不足等、様々な課題を抱えていることが提示された。

なお、研究課題名に示した「キャリア計画」とは、「キャリアデザイン」と同一の意味で使用した。

2023年度CDP-E区分の授業は下記のように行った。

回	日程	内容
第1-2回	9/21	ガイダンス、チームビルディング、美瑛町まちづくり推進課による課題提示
第3-4回	9/28	講義（企画の立て方、調査方法等）、チーム別作業（企画考察等）
第5回	10/12	講義（中間相談会に向けて説明等）、チーム別作業（企画の検討・プレゼンテーション資料作成）
第6-7回	10/26	美瑛町との相談会（チームごとに企画案を美瑛町ご担当者に提案・質疑応答により企画の可否を探る）
第8回	11/ 2	チーム別作業（中間相談会を受けたコメントを検討・プレゼンテーション資料の作成）
第9-10回	11/16	中間発表会（チームごとに企画（未完成でもOK）を他チームに発表、学生は相互に学び合う）
第11-12回	12/14	発表会（チームごとに企画をプレゼンテーション・最優秀賞や優秀賞の受賞チーム決定・美瑛町ご担当者から評価コメント）
第13-14回	12/21	振り返り会（チームごとに提案した企画の評価・チームワークの省察）
第15回	2023/1/20 (土)	金回発表会（各区分の最優秀賞受賞チームが全履修生と全提携団体の担当者、授業担当教員に向けて企画を再度プレゼンテーション、学生賞や提携団体賞等を競う、全体評価）

図 1. CDP-E 区分 授業スケジュール

2. 研究実施内容

2.1. 調査対象

2023 年度、CDP-E 区分に履修登録した 38 名の学生は、学部・学科が異なる 1 年生 22 名 (57.9%)、2 年生 9 名 (23.7%)、3 年生 7 名 (18.4%)、4 年生 0 名 (0%) であり、1 年生が過半数を占めている。CDP は 2 回受講が可能であるが、2 回目の受講生は、38 名中 1 名 (2 年生) である。38 名の学生は 4~5 名ずつ 9 班に分かれて話し合いを重ね、12 月の発表会で企画提案に臨んだ。

CDP の授業開始 (9 月~) に先立ち、美瑛町のことを詳しく知るために E 区分に履修登録した 38 名の学生に美瑛町視察参加を呼びかけたところ、4 名の学生 (1 年生 2 名、3 年生 2 名) が参加した。美瑛町役場で美瑛町の歴史、産業、文化、教育、行政の取り組み等を聞き、様々な施設の見学、藍染めや収穫体験等も行った。

調査結果は、①受講生 (38 名)、②美瑛町視察参加学生 (4 名) として記載した。

2.2. 調査時期および方法

地域振興等に関する質問紙調査 (14 項目) を、38 名の受講生に 9 月の授業前 (pre) と 12 月の第 14 回授業終了後 (post) に Google フォームで行った。

さらに、美瑛町視察に参加した 4 名の学生には、2024 年 2 月に Google フォームで質問紙調査を行った。

2.3. 分析の方法

自由記述の分析は、立命館大学 樋口孝一先生によって開発されたテキストマイニングのフリーソフトウェア『KH Coder』と Excel を使用した。KH Coder とは、テキスト型 (文章型) データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアであり、テキストマイニングとは、文章から意味のある情報や特徴を見つけ出そうとする技術の総称をいう [末吉美喜 2019]。本研究では、質問紙調査の自由記述データからテキストマイニングの手法を用いて分析した。

KH Coder にかけたのは、地域振興等に関する質問紙調査の「13.地域振興や地方の活性化について、どのように思いますか。」について、授業前 (pre) と授業終了後 (post) に行った。pre の有効回答数は 36 名、post の有効回答数は 15 名となり、pre と post に差が出たため、n=15 で統一した。

なお、記述文から描画する共起関係の語数、最小出現数の回数をサブグラフ検出 (共起の程度が強いコードを線で結ぶことで関連性を把握) で示し、同じ色でグループ化された円は同じ文章中に現れた語の結びつき、円の大きさは出現回数を表す。

2.4. 結果および考察

①対象：受講生 (38 名)

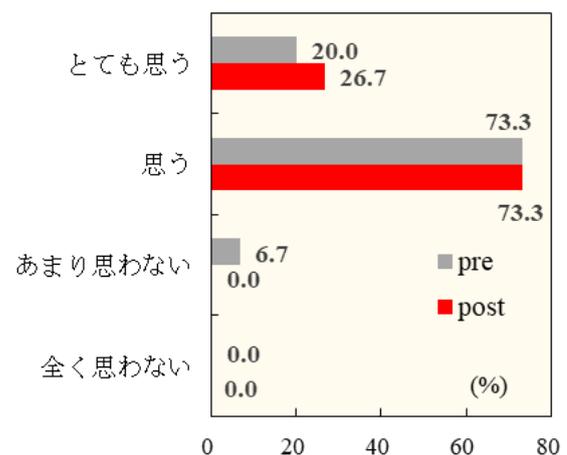


図 2. 「10. 今後、地域振興や地方の活性化に積極的に関わりたいと思いますか。」
(pre/post: 有効回答数 n=15)

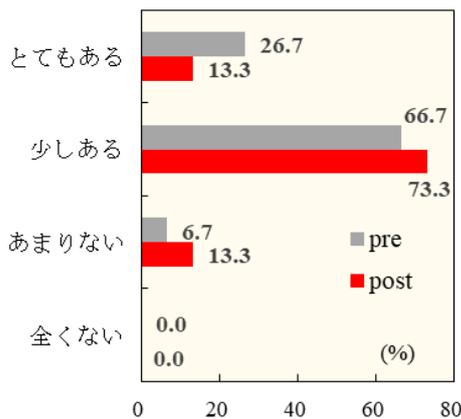


図3. 「11.地元や地方のために（公務員に限らず）働くことに興味がありますか。」
(pre/post:有効回答数 n=15)

図2. 「今後、地域振興や地域活性化に積極的に関わりたいと思うか」に対して、「とても思う」と「思う」と回答した受講生は pre (93.3%), post (100%), 「あまり思わない」と「全く思わない」は, pre (6.7%), post (0%) であった. 元々, 地域振興等に関心をもつ学生が履修登録していたと考えられるが, 高い水準で「地域振興等に関わりたい」と思っていることが示された.

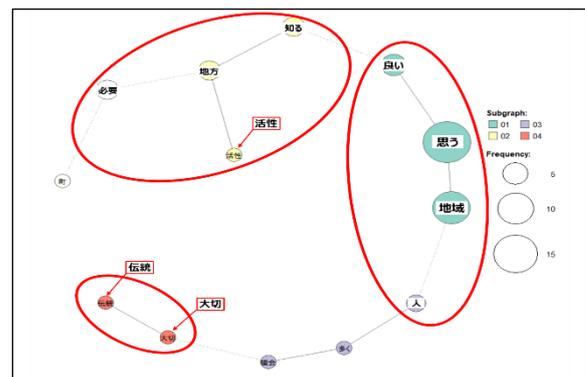
さらに, 図3. 「地元や地方のために（公務員に限らず）働くことに興味があるか」に対して, 「とても興味がある」と「少し興味がある」と回答した学生は, pre (93.4%), post (86.6%), 「あまりない」と「全くない」は, pre (6.7%), post (13.3%) である.

この結果から, 地域振興や地域活性化に積極的に関わりたいと思っても, 職業として関わることについては若干低い結果となった. 特に, post の回答数が少なく一概には言えないが, 1年生の受講生が22名(57.9%)と過半数を占める中で, 「地元や地方のために働くこと」に関しては, まだ将来が描けていないことも考えられる.

図4は, 授業開始前に「地域振興や地方の活性化について, どのように思うか。」に受講生が回答した結果である. 頻出度の多い「地域」は「思う」, 「良い」, 「人」と結びつき, 「地方」は「活性」, 「知る」「必要」, 「伝統」は「大切」等と結びついている. 抽出70語の内, 一番多い抽出語は「思う」であるが, 「地域」は2位, 「良い」は3位, 「地方」は5位, 「人」は7位, 「活性」は8位である.

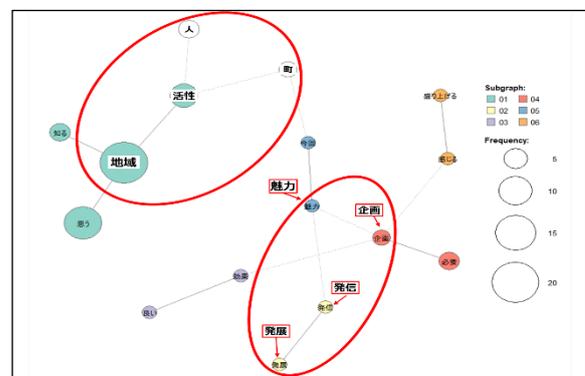
学生の記述文からは, 「最近, ふるさと納税などの動きも増えているが, 実際に地域や地方のこ

とについて知る機会はあまり無いので, 多くの人たちに知ってもらい, その地域の伝統などを守っていくためにもとても大切なことだと思います。」 「地域コミュニティの発達にもつながるので私たち一人ひとりが考えて向き合うべきだと思います。」等, 地域振興や地域活性化について向き合うべきだという意識の高さが見えた.



*記述文から描画する共起関係70語, 最小出現数2回以上をサブグラフ検出

図4. 地域振興や地方の活性化について共起ネットワーク (pre:有効回答数 n=15)



*記述文から描画する共起関係70語, 最小出現数2回以上をサブグラフ検出

図5. 地域振興や地方の活性化について共起ネットワーク (post:有効回答数 n=15)

図5は, 授業終了後に「地域振興や地方の活性化について, どのように思うか。」に受講生が回答したものである. 「地域」は「活性」そして「人」, 「町」と結びつき, 「魅力」は「企画」, 「発信」, そして「発展」と結びついている. 抽出70語の内, 一番多い抽出語は「地域」, 「活性」は3位, 「人」は4位, 「企画」は7位, 「町」は8位である. 学生の記述文からは, 「私達のような若い人たちが積

極的に活動していくべきだと思う」、「ふるさと納税などで地域によって偏りが生まれてしまっているという話をよく聞くので、そのような課題を解決するために、今回のように地域の魅力を発信することは大切だと思う」、「地域振興や地域活性化に携わる際は、その町について入念に調べ、現地を訪れることが必要である。その行動が企画のヒントとなり提案したことが実現され、実際に目に見える効果が現れるのならば、地域振興や地域活性化に携わるやりがいを感じるのではないかと思います」等、前向きな意見が得られた。

図4. 図5から、授業を通じて想定した「地域」は「活性」や「人」と共起性を持っていることが明らかになった。

②対象：美瑛町視察参加学生（4名）

何れも、n=4

表1. 「1.美瑛町視察に参加したことは、あなた個人として美瑛町への企画提案に役立ちましたか」

A	美瑛町視察ツアーに参加したことにより、企画提案に大いに役立ったと考える。理由としては、工芸品・広大な土地・空気感などインターネットだけでは出てこない情報を実際に視て体験出来たため。そこから、視野を深掘りして企画を提案できたため実際に訪れることは多面的に物事を捉えるためにも必要だと感じた。
B	美瑛町視察ツアーに参加したことで、自分が感じた美瑛の魅力を生かした。特に、夢叶蝶をイベントに取り入れるという発想は、皆空窯を訪れなければ出てこなかったと思います。自分が体験したからこそ、提案に繋げることができたので、視察ツアーはとても意義があったと思います。
C	美瑛の景色が綺麗なことや食べ物が美味しいことはすごく理解出来るいい機会にはなったと思うが、直接企画提案に繋がったかと聞かれたらそのような事はないという感覚です。どういうことが伝わる企画にしたいかという参考程度だと思います。
D	美瑛町視察ツアーに参加したことで美瑛町を肌で感じる事ができ、また地元の方と実際にお話をしたことで企画提案の際の美瑛町の需要を汲み取って企画を考えるという視点を持つことができたため、役立ったと思っています。

表2. 「2.美瑛町視察に参加したことは、グループで話し合う時にあなたの考えや感じたことをメンバーに伝える際に役に立ちましたか」

A	グループで話し合う際に、自分が見た景色や体験を話す機会が多く、役に立ったと考える。実際にツアーに参加したことで、自治体の方から多くの資料をもらえる機会が多くSNS やインターネットには出されていないものばかりだったため役に立った。特に、私の班は、「食」も企画したため美瑛町にある飲食店を調べる際に美瑛町ツアーで頂いた美瑛町にあるパン屋さんの book は参考にさせてもらった。
B	視察ツアーで体験したことは、メンバーにも共有しましたが、あまり伝わらなかったように感じます。自分が感じたこと・考えたことよりも、北海道で撮った風景や食事の写真を見せる方がメンバーの反応が良かったように思います。
C	何が有名とか何が自分の中の印象に残ったかなどの共有には役に立ったと思っています。やはり自分の中で景色が綺麗ということがすごく印象に残っていたので、そこを全面に押し出したいという意見を出すことができたと思います。
D	自分の意見を伝える際には美瑛町に実際に訪れたことで考えや感じたことにより説得力を持たせることができたと考えます。また、美瑛町を訪れて実際に感じたことを伝えることは美瑛町の魅力グループ全体としてより効率的に捉えることができたと思います。

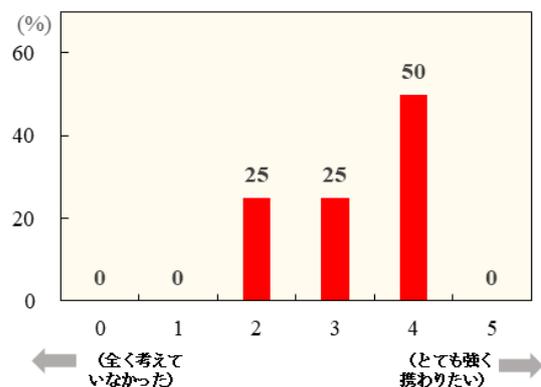


図6. 「3.CDPを受講する前、地域振興に自らが携わりたいという気持ちはどのくらいありましたか」

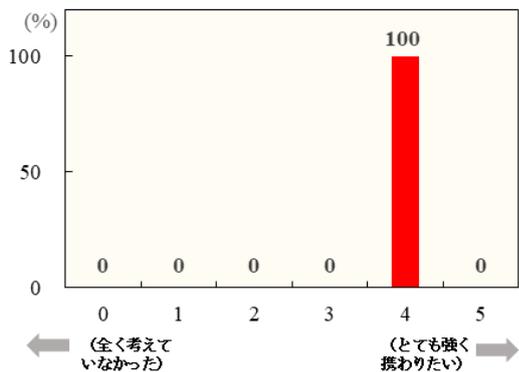


図7. 「4.CDP 授業が全て終了した今現在、地域振興に自らが携わりたいという気持ちはどのくらいありますか」

表3. 「5.上記の3.4.の設問で答えたことについて、具体的に気持ちが変わった（または、変化しなかった）その理由を書いてください」

A	企画提案に携わる前でも、自分の目の前にある地域をより良くしたいという考えがあり地域復興には携わってみたいという思いがあったため4を選んだ。5でない理由は、地域復興と聞くと短期的でなく長期的に行ない成果をだすイメージがあったため携わりたい気持ちはありながらも時間の確保が難しいと感じたため。
B	美瑛町が抱えている問題は、私の地元にも共通するものがあると思います。CDPを受講し、課題解決に取り組んだことで、自信ができました。そして、CDPで学びは、地域のお祭りや、子どもの支援にも有効なのではないかと考えるようになりました。今まではそれほど興味がなかった地域振興に、機会があれば携わりたいと思うきっかけになりました。
C	元々ボランティアのサークルに入っていて、お祭りの手伝いをしたりしていたので、特に自分の中の行動に変化は無かったからです。しかし、地域活性化のために何かすることが楽しいことだと再認識することが出来ました。
D	地域振興に携わってみたいという漠然としていた気持ちが実際に地方自治体の方とも関わらせていただきながら視察、企画、提案までを経験し地域振興がどのようなものなのかを具体的に知ることができ地域に対する愛着が湧き長期的にひとつの地域に対して課題解決をすることにも興味を持つようになりました。

表1は、美瑛町視察ツアーに参加したことが企画提案に役立ったか、表2はグループのメンバーに伝える際に役に立ったか、について質問した。結果から、美瑛町を訪れて見聞したことは一定の効果があることが明らかにされた。

図6はCDPを受講する前に、地域振興に自らが携わりたいという気持ちはどのくらいあったか、図7は受講後のその気持ちはどのくらいあるかを質問した。受講後は、全員が「4」を選択している。携わりたい気持ちは強くなった、あるいは変化なしという結果である。

表3は受講前後で地域振興に自らが携わることに、気持ちが変わった、または変化しなかった理由について質問した。CDPを受講したことで、地域振興について理解が進み、身近なお祭り、子どもの支援、ボランティア等に関心を高められたことは意義があると捉えられる。

3. まとめと今後の課題

美瑛町から与えられた課題に受講生は熱心に取り組み、美瑛町の担当者からも高い評価を得た。

ベスト3に選ばれた企画は、「美瑛からのおもてなし～極寒グランピングへの招待～」、「映像を駆使した体験型プログラム：喫茶店列車—美瑛号—」、「都会に美瑛がやってきた！」であり、いずれも美瑛町のことをしっかり調べ、ワクワク感や実現性を兼ね備えた企画提案であった。ちなみに、審査基準は5項目（説得力、プレゼン力、発想力、実現可能性、事業のワクワク感）があり、学生にとってもこの5項目を意識して企画提案を行った。現在、美瑛町では実現化に向けて検討がなされている。

このベスト3に選ばれた内、2つの班のメンバーには、美瑛町視察に参加した学生が一人ずつ含まれていた。さらに、4位には美瑛町視察に参加した学生が含まれていた。この結果から地域の産業、文化、地形、歴史等に触れ、地元の人たちとの対話、そして地域を五感で感じることは、地域振興について考える上で必要であり、美瑛町が抱える課題をより深く考えることができたと考察できる。

美瑛町視察に参加した4名の学生は、CDPを受講したことにより初めて現地に足を運び、現地を肌で感じ、美瑛町まちづくり推進課の担当者から地域のことについて様々な詳細な話を伺った。こ

の経験は、地域振興を考える上で大変役に立ったと言える。視察直後の感想には、「美瑛町を訪れ、地元の方々のお話を聞くことができた事でとても多くのことを得られたと感じている。地元の方々の美瑛町に対する愛情やこんな風になって欲しいという思いに応えられるようなアイデアを出し活かせたらと思っています。」、「今回初めて美瑛町を訪れ、沢山の経験をさせていただく中で参加する前には考え得なかったことに考えが巡るようになったと感じています。豊かな自然の中で普段では経験出来ないことをさせて頂き、授業とは関係の無い部分でも視野が広がるような経験だったと感じています。」と述べている。4名の内、3年生の2名は班のリーダーとして、1年生の2名は副リーダーとして活躍した。

以上のことから、今後もCDPで地域との提携には、現地を視察する要素を取り入れる必要があると考えている。加えて、CDPで与えられる地域の課題の先には、地域振興や地域活性化があることを受講生が理解することも重要である。そのためにも地域振興や地域活性化のための施策を考えるという目標を常に伝えると同時に、課題解決型学習の充実が求められる。

受講生が関係人口として、所謂「よそもの」が地域振興に関する課題を本気で考えたことに一定の成果があったと考えている。一方、受講生は学部・学科・学年が異なるメンバーで約3か月後に企画提案を発表しなければならず、このCDPの授業だけで学生が地域振興を意識し、延いては自らのキャリアデザインを促すという本研究の目的が達成されたとは言い難い。

そのため、同じく正課キャリア教育科目であるキャリアデザインⅠ・Ⅲで、令和6年度に試験的に「地域振興とキャリアデザイン」というテーマで90分間授業を行うことを計画している。前期と後期合わせて800名以上の学生が履修登録すると予想され、今回の研究と併せ、「地域振興とキャリアデザイン」を全学的なキャリア教育の1テーマとしていく計画である。

現在、本学のキャリア教育科目は全学共通科目として位置づけられている。このキャリア教育科目での学びが、各学部学科での地域振興や地域活性化に関する、より深い専門領域の学びに繋がり、学生のキャリアデザインに意識づけられることを期待したい。キャリアデザインⅠ・Ⅲは受講生も

多く、CDPのように現地に行くことは難しいが、国内の地域が抱える課題を示し、国や地方自治体等の取り組み、そして地域振興、地域活性化のために携わる人々の活動を紹介する等、学生のキャリアの選択肢の一つとして、地域振興を意識したキャリアデザインを促すこととしたい。

4. この助成による発表論文等

現段階では発表の予定はないが、将来的には日本キャリアデザイン学会での発表を検討している。

引用文献

- ・ 末吉美喜 (2019) 『テキストマイニング入門—ExcelとKH Coderでわかるデータ分析』オーム社
- ・ 電通 abic project 編 (2009) 『地域ブランドマネジメント』有斐閣
- ・ 田中輝美 (2017) 『関係人口をつくる』木楽舎
- ・ 石山恒貴 (2019) 『地域とゆるくつながろう!』静岡新聞社
- ・ 山田秀樹 (2016) 「大学生の幸せに関する研究—テキストマイニングによる自由記述の分析—」

付記

本研究は令和5年度大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2306)「地域振興を意識した学生のキャリア計画を促す科目の開発—キャリア教育科目を通して—」を受けたものである。

謝辞

研究協力者として、北海道美瑛町まちづくり推進課の齊藤丈朗氏と柳田瑤介氏には、課題設定、美瑛町視察の行程計画、各関係機関との連絡調整、案内、授業開始後は受講生へのプレゼンテーション、相談会や中間発表会での助言、発表会での審査等を行っていただいた。

加えて、本学のキャリア教育センター立野昌代氏が調査データの分析処理を行ってくれた。そのデータ処理のおかげで研究が深まった。

ここに記して謝辞とする。